

耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-Kouhei.org



皆さん、こんにちは。立春は過ぎましたが、まだまだ寒い日が続きます。くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語をご紹介します。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということなのです。

冬になると、朝起きても布団から出たくないです。学校や仕事のために不承不承起きざるをえません。と言って使った「不承不承(ふしょうぶしょう)」

も仏教用語です。もともとは「請」という漢字を用いて「不請不請」と書きしました。「不請」には「望まれない」「頼まれていない」という意味があります

仏教には「不請の友」という言葉が登場します。「大無量寿経」に「諸々の庶類(しよるい)のために不請の友となる」と記されています。「さまざまな人々のために進んで友となる」という意味です。

仏や菩薩が衆生(しゅじょう)人々)や「生きとし生けるもの」を救うために、自ら働きかけることを「友となる」と喩えてい

る表現です。「人々は求めていないけれども、人々の心を察し、仏や菩薩が自ら友となって救ってくださる」という有難い話です。つまり、仏や菩薩とはそのような存在であることを説いています。

このように「不請」とは、「嫌々」ということではなく「仏や菩薩が衆生に対して進んでいたらさかせる」ことを意味します。私たちには「知らないうちに仏や菩薩に救われている」「仏や菩薩はいつも寄り添ってくれている」ということです。

仏や菩薩でなくても陰で支えてくれている人はいます。両親や友人が好例です。自分の知らないところで働きかけてくれている「不請」の人々です。

こうした本来の意味が理解されてきた昔は「不請の友」と揮毫する人もいました。例えば、学校では、卒業記念に生徒に一筆書く際に「不請の友」と記し、横に自分の名前を添える先生が結構いたそうです。先生の生徒を思う気持ちの表れであり、生徒にとっては卒業後も心の支えになったことでしょう。ところが「頼まれていなくて

もやる」という含意が「本意ではないがやる」「嫌々ながらやる」というニュアンスに変化し、やがて「承知していない」という意味を込めて「不承不承」という漢字に転じました。

このコラムで何度もお伝えしているように、仏教用語から転じた日常用語の多くは本来とは逆の意味で使われています。それは、人間の心の身勝手、我欲のなせる業(わざ)です。「不承不承」に至っては、漢字まで変わってしまった(笑)。

「欲や願いを実現することが人生だ」と考えれば、思い通りにならない現実には「不承不承」。いつも誰かに支えられているという感謝の気持ちを持ってば人生は「不請不請」です。自分も「不請不請」家族や友人を支えることこそ、仏教の論ず生き方です。

自分にとって「祥しくない」という意味で「不祥不祥」とも書きますが、これも本来の意味と違いますね。「不承不承」ではなく、皆が「不請不請」生きていけば、本当に素晴らしい世の中になります。そう願って、ではまた来月。

※



尾張名古屋歴史街道を行く 大塚耕平 1/26 新刊

—社寺城郭・幕末史—

今つながり、解き明かされる「尾張名古屋の通史」
先史時代から知られざる幕末史まで 尾張名古屋を知りつくすための一冊

尾張名古屋は畿内と近く、古代より都と東国、鎌倉、江戸をつなぐ街道の要所であり、街道の発展とともに社寺、城郭、町の歴史が形成されてきました。
本書では、鎌倉街道、名古屋城下町、城下町から東西南北に延びる脇街道を探访し、尾張国の地政・歴史を概観します。
先史時代から幕末まで、尾張名古屋の歴史をより深く知るための一冊です。



大塚耕平著 発行: 中日新聞社

定価: 1,760円 税込(本体価格1,600円+税10%) ISBN: 978-4-8062-0802-0



大塚耕平事務所 かわら版担当: あさい
TEL 052 757 1955